社会人基礎力を評価の指標として活用、能力育成が明確に。生徒のチカラを伸ばし、大学でも活躍できた

平成22年4月まで、「社会人基礎力」に関心のある人なら誰でも自由に参加し、意見を交換することができるコミュニティサイトとして「基礎力.net」（経済産業省・河合塾運営）が開設されていました。そこでは、大学のみならずさまざまな教育機関の関係者、企業人、学生などの会員が、「社会人基礎力」についての情報交換や実践報告を行いました。

この「基礎力.net」に参加して情報交換を行い、「社会人基礎力」教育の考えを深めながら、高校教育に「社会人基礎力」育成の導入を試みた教員がいます。静岡県立浜松西高等学校の大村勝久先生です。大村先生は、汎用的能力育成などにも強い関心を持ち、能力育成の観点に立って授業を改善していく方法を模索していました。そのような中で知った「社会人基礎力」の観点をいかに授業に取り込んだのか、先生の取り組みを紹介します。小中学校、高校など、若いうちから「社会人基礎力」の育成をすることが大事であるという点からも、注目される試みであると思われます。

総合的な学習の時間の学びが、大学へつながる

高等学校でも、平成15年度から「総合的な学習の時間（以下、総学）」が導入されています。新学習指導要領では、その目標を「横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的、創造的、共同的に取り組む態度を育て、自己のあり方、生き方を考えることができるようにする」としています。

しかし、「総学」の狙いを実際の教育活動に展開するとなるとなかなか難しいようです。実際に、学校あるいは教員によって捉え方がまちまちだ、教科活動とは全く異なる教育活動と捉え、遊びの時間にもなりかねない、といった声も上がっています。

浜松西高校では、将来のライフキャリアを形成するために必要な態度・意欲・能力を育成することを目的とし、進路選択と進路実現のステップとすべく、グループによる論文執筆を行うゼミ形式の授業（「総学ゼミ」）を行っています。浜松西高校は、生徒のほぼ全員が大学へ進学します。こうした高校で生徒が自らの関心、興味、適性を考えながら、学部や学科、大学を選ぶことは、そのまま自分の生き方はどうあるかを考え、将来のキャリアを描くことにつながります。大村先生は、「基礎力.net」での議論もヒントにして、自ら担当するこの「総学ゼミ」の活動で生徒の「社会人基礎力」を育成する試みを行いました。

「総学ゼミ」には、いくつかの効果があります。まず、このような学部選択につながる学習活動は、まさにキャリア教育そのものであり、同時に、自分の関心と適性から学部を選ぶことは、大学進学への動機付けになります。また、高校での学びを単なる受験勉強と捉えるのではなく、大学での学びにつながっていることに気付かせるのは、学習の意欲付けにつながります。さらに、副次的な効果としては、大学での学びと同じようなスタイルでの学習は、大学入学後の学びをスムーズにする初年次教育の先取りにもなりますが、そもそも高校と大学で学びの方法に差をつける考え方自体への問題を提起することでもあります。

大村先生は、このゼミの柱の一つに「社会人基礎力」の育成を加えることにしました。高校生にとっての「社会人基礎力」は、単に社会で必要とされる能力であるというだけでなく、ゼミ活動やそれ以外の学習活動をより活発にするための能力でもあり、また進路選択や学びへの動機付けや、大学と同様のスタイルでの学びを下支えするものであると考えたのです。

論文のテーマは生徒が自分達で決め、大学へのフィールドワークも

「総学ゼミ」では、1年かけて生徒の興味や関心の高いテーマに関する論文をグループで執筆します。活動は通常は2週間に1回、50分の授業内で行います。

この「社会人基礎力」の導入を試みたゼミでは、生徒が主体的に取り組むことを目的に、テーマは生徒自身で検討させ、同じテーマを希望する生徒同士でグループを作りました。

参加者17人が、2〜4人のグループに分かれ、このグループで1年間活動します。テーマ研究、論文作成といった授業内の活動だけでなく、夏休みを利用して、自分達の学習にア

生徒が選んだテーマとフィールドワーク先

テーマ	内容	フィールドワーク先
平和への課題	紛争が多いが紛争の原因の探求、そして自分たちが可能な支援を探る	静岡文化芸術大学
多文化共生社会	静岡県にはブラジル人も多い。理想の多文化共生社会をどのように構築したらよいのか生活や教育など複数の視点で探る	静岡文化芸術大学
理想の日本像を探る	中国、ブラジル、アメリカ、ドバイなどの日本との輸出入の関係を調べ、よりよい日本像を探る	静岡大学
日本が京都議定書目標を達成するための施策	カーボンオフセットなどの環境経済に関する論文	静岡大学
成功する企業とは	財務諸表による成功する企業の比較（トヨタとホンダ、東京ディズニーリゾートとＵＳＪ）	地元の信用金庫
日本の経済発展とアフリカの開発	戦後の日本の驚異的な復興を探り、その復興を活かした外国への支援が可能か探る	静岡県立大学

資料提供　静岡県立浜松西高等学校　大村勝久先生

1年間の流れ

実施日	内　容	実施日	内　容
4月1回目	ガイダンス（＋事前自己評価）・グループ編成	10月1回目	論文作成①　構想
5月1回目	グループテーマ決定	10月2回目	論文作成②　構想
5月2回目	テーマ研究①	11月1回目	論文作成③　構想
5月3回目	テーマ研究②	12月1回目	論文作成④　校正
6月1回目	テーマ研究③	12月2回目	論文作成⑤　校正
6月2回目	テーマ研究④	12月3回目	論文提出
6月3回目	フィールドワーク先決定	1月1回目	ゼミ代表決定
7月1回目	フィールドワーク事前学習	1月2回目	発表準備①
8月	フィールドワーク	2月1回目	発表準備②
8月末	フィールドワーク事後報告書提出	2月2回目	学年全体発表会（1日）
9月1回目	中間発表準備	3月1回目	1年間の振り返り（事後自己評価）
9月2回目	中間発表　ポスターセッション		
9月3回目	中間振り返り（自己評価、相互評価）		

資料提供　静岡県立浜松西高等学校　大村勝久先生

ドバイスをもらうために、地元の大学や企業へ出かけるフィールドワークも行いました。

■1年間の流れ～8月フィールド調査、9月中間発表、2月学年発表

・4～5月
取り組みたい大テーマ別にグループを編成する（例：国際平和、国際経済、会計など）。さらにグループごとに話し合って、研究する詳細なテーマを決める。テーマ研究のための指定図書や論文を決め、知識を深める。

・6～7月
深い探求をするために夏休みに実施するフィールドワーク先を探し、質問事項をまとめる、依頼状を作成するなど依頼の準備をする。

・8月
フィールドワークで専門家から指導・助言をもらい、報告書を作成する。

・9月
中間報告書を作成し、ゼミ内で中間発表会を行う。

・10～12月
グループ論文を完成させ、発表用のパワーポイントを作成する。

・1月
ゼミ内でグループ論文集を作成し、プレゼンを行う。学年全体発表会に出場するゼミ代表を投票で決める。

・2月
学年全体発表会を行う。

読ませ・質問し・報告させ…「3つの力」を意識した生徒への働きかけの整理

高校生は、「社会人基礎力」という概念はもちろんのこと、言葉すら知りません。そこで、最初の授業で「社会人基礎力」のガイダンスを行い、「社会人基礎力」が必要とされている背景や、「総学ゼミ」との関連を説明しました。そして、内容の濃い論文を探求する上では、論文の技法を取得するだけでなく、ゼミ活動中に身に付けていく「社会人基礎力」を意識することも大事なのだということを、ガイダンスだけでなく授業中にも繰り返し伝えました。ただし、活動の場面では、「12の能力要素」の言語を用いることはせず、具体的な活動に置き換えて、ファシリテーションしていきました（p507活動報告参照）。

先生は、ゼミ活動の一つ一つを、「社会人基礎力」を高めるための活動と意識し、以下の工夫を行いました。

■「前に踏み出す力」を発揮させる工夫

・生徒が「主体性」を発揮できるように、それぞれが希望するテーマ研究に取り組ませ、また同じテーマを希望する生徒同士でグループを作った。テーマの選定に際しては、自発的活動を誘うために、先生からはテーマに関する誘い水的役割として書籍、雑誌、サイト、ワーキングペーパーなどを与えるに留めた。論文などのレベルは、自分達のレベ

ルよりも少し高いものを要求し、モチベーションを高めた。

・フィールドワーク先も自分達で探し、依頼状・お礼状の作成や、日程調整など全て生徒自身に行わせるなど、自らが行動しないと何も進まない状況を作った。

・グループ活動が中心になるが、ゼミ全体で同じ方向性を持ったテーマに取り組んでいるので、全体の情報の共有化が大切と考え、毎回の活動について授業開始と授業終了時に、各班から進捗を報告させた。報告することで、ゼミ全体の自発的活動を活性化させ、かつ各生徒が責任を持ってグループ活動を行うことになると考えた。

・全員が主体的に参加できるように、グループの人数は最大で4人までとした。

■「考え抜く力」を発揮させる工夫

・レベルの高い論文作成に取り組ませることは、「考え抜く力」を高めることになるため、考察に重点を置いた論文作成や発表活動を求めた。グループ内の知識の共有化を図り、深い思考を促すため指定図書を与える、指定図書以外の参考書籍やサイトなどは自分達で用意させる、授業ではグループ内で相互の考えをぶつけ合わせる、といった工夫を行った。

・多くの課題や制約を与えることで、計画的にこなさなければならない状況を作った。プランニングシート、論文、パワーポイント、お礼状などは、字数、発表時間など制約を設け、必ず締め切りを守らせるようにした。夏休みのフィールドワークの日程調整をさせることでも、「計画力」を高められると考えた。

・先生は、授業内の机間巡視において、生徒個々の意見や活動を聞き出しながら質問や課題を与え、他のメンバーの意見を求めるなどして、考えを深めることを促した。

■「チームで働く力」を発揮させる工夫

・グループ活動では「チームで働く力」を発揮する場面はいくらでもあるが、意図的にグループ活動を増やした。例えば、個人のテーマを組み合わせた論文ではなく、グループで一つの論文とすることで話し合いをさらに促し、必ずメンバーの合意の上、決定することとした。

・先生は「総学ゼミ」のメールアドレスを取得し、授業以外の事前指導や事後指導の連絡はメールで班長にしか伝えず、班長が全班員と連絡を取るようにした。班長には個人用のアドレスを取得させ、班員同士が相互に連絡が取れるようにして、グループ内の情報の共有化を図らせた。

・さらに、校外でのフィールドワーク参加により「チームで働く力」を向上させた。

大学での学びの真剣さに圧倒され、文系でも数Ⅲの必要性を痛感

フィールドワークは、グループごとに、自分達の探求するテーマに応じた専門家を訪ね、学習についてアドバイスをもらい、今後の探求活動に生かすというものです。自分達で訪問先を探し、4カ月学習したことをプランニングシートにまとめ、依頼状、質問事項と共に送り、依頼を受けてもらいます。その後、日程調整し、実際に訪問し、最終的に報告書にまとめます。

生徒のフィールドワーク

（S大学ゼミに参加）立ち合った教員の活動日記（「基礎力.net日記」より）

本日大学のゼミに参加してきました。

女子生徒２名の参加です。私にとっても国際関係のゼミに参加することは初めてであり、非常に良い勉強となりました。進路指導をする上でも非常に役立ちます。生徒には冗談で発表するかも知れないと言っておいたところ本当に発表することとなり慌てて行うこととなりましたが、こんな素敵な経験をさせていただき彼女たちも緊張しながらも感激です。また日頃もっと勉強しなさい、本を読みなさい、勉強しなさい、本を読みなさいと繰り返し、教科の授業でも、もちろん総学ゼミでも言い続けているのですが馬耳東風でした。また２人ともイギリスなどに短期留学もしており英検も合格しているので少しは自信もあったようですが、今日の留学生の英語を聞きとれず、そして世界史・倫理・政治経済の勉強も足りないことにも気付きました。最後に１回のゼミで１００ページの英語の本を読む課題が出された。そのテキストを開けば微分積分がでていました。彼女らはいかに勉強に取り組む姿勢が悪く、そして認識不足かということを自覚できたようです。私は文系でも経済の数学は数Ⅲまで必要であり、文系学部は毎週一冊の本を読むのは当たり前ということを言っておりました。そのことが本当だと知り愕然としていたようです。帰り際、掲示板に１年生の課題として毎週一冊の新書を読むことが書かれており携帯写真に納めさせました。生徒共々非常によい刺激となりました。彼女らの今後のまとめに期待します。

資料提供　静岡県立浜松西高等学校　大村勝久先生

フィールドワークの狙いは二つあります。一つは、専門家の指導を受け、深い探求をすることです。訪問先が主に大学のため、進路研究にもなります。

もう一つは、「社会人基礎力」そのものを高めることです。生徒だけでフィールドワーク先を見つけ、調整をし、初対面の外部の方に教えを請うということはかなりの緊張感を伴うため、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の「３つの力」を育成するための貴重な体験と考えられます。

このフィールドワークを通して、生徒たちは日頃の高校での学習の意味や、自分で学ぶことの必要性も知ることにもなります。

ポイントは教員自らの研鑽姿勢
コミュニティサイトへの参加と研修会出席

先生は、自らの「社会人基礎力」の理解を深めることにも積極的でした。生徒向けのガイダンスは、自分自身の理解を深める場と意識していました。また、経済産業省の「社会

「基礎力.net」に掲載した活動報告（事例）

●教員の活動報告

先日グループワークの研修会に参加した。本当に勉強になりよかった。グループワークする上でのヒントも学ばせていただいた。早速、ゼミの生徒用に翻訳してみた（翻訳になっていないかも）。
以下紹介します。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
班長へ
いつもご苦労様
グループ活動をしていて班長はいろいろと悩むこともあるでしょう。
今日はいくつかグループ活動をする上でヒントを出してみたいと思います。以下を参考にしてください。
チェックリストです。
ＣＫ１　目標の明確化
グループ活動の目標は明確になっています。論文を作成することはもちろんですが、グループ論文を作成することを通じて、「社会人基礎力」「キャリア能力」「リテラシー」「専門知識」を身に付けることを目指していました。確認しましょう。
ＣＫ２　手順化
・ 仕事の手順＆スケジュールは班長の頭に明確に入っていますか。班長自身が入っていないのでは困ります。
・ また班員全員に伝わっていますか。（班長だけではグループ活動の意義はありません）
・ メンバーの役割はできていますか。ただしお互いが何に取り組むのかわかっていますか。その逆に共有化はできていますか。個々が作成したものを繋げて終了ではありません。いかに一つのものにできたかが大切です。首尾一貫しているかです。次の章へ進んだら違う結論が得られるようでは困ります。
ＣＫ３　時間管理
(1)テスト前です。時間管理はしっかりできていますか。昨日のメールを確認し班員にもしっかり伝えてください。
(2)提出期限＆時間を守れない人にどのように督促しますか。
ＣＫ４　意志決定
・ 班長だけで全て決めていませんか。あるいは班員の誰か一人の意見で決めていませんか。できるだけ全員のコンセンサスをとり、グループの意志決定をしてください。
そうしないと仕事は進みません。良い仕事ができません。気持ちよく前向きに取り組みたいものです。
ＣＫ５　規範（ノーム）
・ ルールとは違うグループ内にある暗黙のルールで仕事が滞っていませんか。（適当に済ませてしまおうとか班長に任せておけばよいとか）
・ 一つの解決方法として思い切って班長は仕事を班員に分け与えてしまいましょう。
※ルールというのは言語化・文字化されたものでノームというのは非言語・非文字化のルール
ＣＫ６　リーダーシップ
(1)課題達成機能（論文作成）
課題達成のために走りすぎて班員の気持ちを忘れていませんか。
(2)メンテナンス機能（グループ内関係維持のため）
お互いを尊重すると言い、課題に取り組むことに躊躇していませんか。
班長は(1)(2)のバランスを取りながらもちろん提出期限を守り良い論文作成を目指してみよう。
ＣＫ７　グループの雰囲気
前向きでない雰囲気があるとしたら誰がその雰囲気を作っていますか。閉鎖的になっていませんか。情報交換を頻繁にしよう。問題と感じたらできれば改善を図ってみよう。
ＣＫ８　コミュニケーションの様子
話し合い活動はしていますか。メールだけで済ませていませんか。話は一方通行になっていませんか。班長（ある班員だけ）が主張だけをしていませんか。あるいはその逆に聞き入っているだけの人はいませんか。もちろんメールも必要です。できるだけメール＋言葉で伝えましょう。
（中略）
実は、以上のことは決して班長だけが必要なわけではなく、メンバー全員が共有し互いに活用して欲しいことです。みんなガンバレ。
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
何てことを今日は全員に理解してもらおうと思いました。班長は以上のことを気にしながら取り組んでいます。

●上記に対してのコメント

経済産業省　○○（担当官）
すごいですね。ここで紹介されている内容は、まさに社会人基礎力に関わる行動ばかりですね。傾聴力・柔軟性・情況把握力等の「チームで働く力」や、課題発見力・計画力等の「考え抜く力」などが濃縮されていますね。
こうして、グループワークを通じて、社会人基礎力を発揮し、徐々に伸ばしていくのですね。大変勉強になりました！

●コメントに対する返信

コメントいただきありがとうございます。私もまだまだ不勉強な部分が多く、いろいろと研修を積みながら指導を進めています。昨年よりもよい指導をしているつもりです。先日「ファシリテーションについて」講演を聴き、会話についてヒント得ることができました。総学ゼミで必要な会話とはダイアログです。いろいろこちらこそ教えてください。

資料提供　静岡県立浜松西高等学校　大村勝久先生

人基礎力」に関するコミュニティサイト「基礎力.net」内のブログに毎回の活動記録を書き込み、振り返りを行うとともに、サイト内にコミュニティを立ち上げ、意見交換することで「社会人基礎力」についての理解を深めていきました。

一方、グループ活動の指導について専門的に学んだことがなかったので、グループ活動、ファシリテーション研修に参加して知識と技術の向上を図りました。

前頁の表は「基礎力.net」に掲載した活動記録、およびそれに対するコメントとそのやりとりです。授業は2週間に一度なので、先生はメールを活用して生徒の指導を行いました。サイトには、自分がファシリテーション研修で得たものを生徒向けの言葉に翻訳し、生徒へのアドバイスとしてメールで伝えたことを書き込みました。

生徒の活動に合わせて「12の能力要素」を再定義し、「能力育成のための評価」を試みる

本来評価には、生徒が自分はどの観点がどのレベルなのかを把握し、その後の学習に生かしていくという機能があります。各教科の観点別評価も、そのためにあるはずなのですが、現状ではその狙いは十分に生かされているとは言えません。

一方「総合的な学習の時間」には、他の教科のように細かい評価の観点は学習指導要領では決められてはいません。しかし、「総合的な学習力の育成」など、目標が幅広く明確な観点が与えられていない分、学習のはかどりや能力向上の促進に、評価を生かすことができます。評価＝育成目標項目を決め、定期的に自己評価をしたり、他者評価を取り入れたりすることで、生徒自身が細かい目標に気付き、成長点も認識できるようになると思われます。まさに能力の育成に評価が効果を上げると言えるのです。

浜松西高校では、「総学」の成績評価につなげる生徒評価の観点として、既に別表（p513）の観点が作られていました。大村先生は、これら5観点を、「社会人基礎力」など一般的に使われている能力観点で表現し直すと、より5観点のイメージが膨らみ、その価値がわかりやすくなると思いました。

そこで、「総学ゼミ」で育成する能力、身に付けてほしい能力を、一般的に使われている能力観点で検討し、評価＝育成の目標項目として、活動での成長が見られるようにしたプログレスシートで明示しました。具体的には、社会で必要とされる「社会人基礎力」の他に、表現、キャリア、教科リテラシー（活用力）、大学での教養など、この活動で生徒に身に付けさせたい能力項目を全て並べ、それらをこの活動に合わせた具体的な定義に置き換え、生徒に振り返りさせやすくしました。

「社会人基礎力」の「3つの力」「12の能力要素」は、既に行っている教育の目標に関連付き、指標として明示されているので、活動の振り返りにより気付きを促すという自己評価の観点としては使いやすいということでした。さらに先生は、この考え方であれば、自分が担当している数学など、他の科目でも「社会人基礎力」の導入は十分可能だと言います。

■振り返りの際の詳細な評価の指標

・「社会人基礎力」

「12の能力要素」は、先にも述べたようにゼミでの活動を想定し、生徒にもイメージできるように再定義されました。レベル基準は4段階（十分高い、高い、少し低い、低い）で簡単に評価できるようにし、エビデンス（根拠となる具体的行動事実）については、生徒がこのような振り返り活動に慣れていないことを考慮して「3つの力」でまとめて書かせるなど、意図的に記述部分を減らしました。シート返却時には、重点目標にアドバイスを記入し、生徒も教員も何を指導されたか、指導したかがわかるようにしておきました。

・「社会人基礎力」以外の指標

「社会人基礎力」以外の表現力、情報活用力、キャリア力などについても、「社会人基礎力」同様、4段階で評価を行いました。

・表現力：口頭表現（発表・プレゼンテーション力）と文章表現力を柱に、このゼミの活動に沿う項目を挙げました。

・情報活用力：文部科学省「情報教育の実践と学校の情報化」「情報A」を参考に、情報の収集加工、判断をベースにゼミ活動に合う項目を挙げました。

・キャリア力：文部科学省のキャリア教育で提唱している4つの領域＝「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」から、「社会人基礎力」や情報活用力だけでは手薄な「将来設計能力」と「意思決定能力」の2つを取り上げて、ゼミの活動に合うように項目を作成しました。

・教科リテラシー（高校で学習する教科の活用度合い）、大学専門知識活用

より深く学ぶ姿勢のベースとなるように、「教科リテラシー」「大学専門知識活用」についても、振り返りの評価項目に加えました。「教科リテラシー」では、探求活動において教科学習を意識させることで、教科学習の必要性を理解させること、「大学専門知識活用」では、大学で学ぶ知識を先取りで学ぶことで、進路適性の理解を深めさせることを狙いとしました。

特に教科リテラシーについては、「総学」というと何か特別なことと捉えてしまい、教科授業と切り離して考える生徒が少なくなかったので、「総学」は教科学習がベースになっていること、教科学習で得た知識が活用できることを伝えたいと考えました。これらは、教員が「総学」を評価する際の指標には含みません。

■評価の実施

事前、中間、事後の3回の自己評価を行い、中間発表後（9月末）にはグループメンバーによる相互評価を行いました。

①事前自己評価

4月に「社会人基礎力」についてのガイダンスを行った後で、約20分かけてプログレスシート（事前自己評価）を記入させました。事前自己評価については、あまり深刻にならず感覚で付けてよいと気楽に付けさせました。しかし、提出されたプログレスシートを点検し、生徒の理解が低いと思われる項目について再度授業内で説明を行い

ました。

②中間自己評価

9月末のゼミ内中間発表会後の次のゼミで、半年間の自分の活動を振り返り、プログレスシート（中間自己評価）に自己評価を記入させました。4月に記入したプログレスシート（事前自己評価）の記述を見ながら自己評価を行うことで、自分自身の成長を見つめられ、また、記入することで「社会人基礎力」について理解を深めると考えてこの活動を重視し、1時間を当てました。

③中間相互評価

②の自己評価の記入終了後、同じ日にグループ内で、メンバー全員で相互評価を行いました。相互評価を行ったのは、グループメンバーから評価されることで自分が気付かない面を知り、また自覚していたことを再確認することで、自分の姿をより客観的に捉え、今後の活動に生かすことができると考えたからです。相互評価を終えた感想を述べさせたり、感想を書かせたりできると、さらによい振り返りができると考えていましたが、時間的な制約で今回は行えませんでした。

④事後自己評価

3月の最後の授業で1時間かけて、1年間の活動を振り返り、プログレスシート（事後自己評価）に自己評価を記入しました。記入のためのガイダンスを10分行い、先生は1年間の活動を具体的な行事や活動を挙げて振り返りを促しました。この後、4月からの活動を振り返り、1年間でどれだけ成長したかを書かせました。

そして自己評価した各指標と、浜松西高校の5観点との関連付けのガイドラインを示

事後評価用プログレスシートに掲載された総合評価の観点

7 1＆2の記入事項から総合評価をしよう。評価視点 1～5についてABCの 3 段階で自己評価してください。
また、一番達成度が高い項目に1つだけ〇をつけてください。
＜A十分達成できた B達成できた C達成できていない＞

評価視点	評価内容（→浜松西高校の5観点）	主な項目（→生徒の自己評価した指標）	自己評価
1	自ら学び、自ら考えることについて（課題を見つけ、主体的に問題を解決する過程を通して、自ら学び、自ら考えることができた）	基礎力⑴アクション ①課題研究に主体的に取り組める ③課題研究の目標に向かい、取り組み続けられる 基礎力⑵シンキング ①課題解決に向けて、現状の課題・問題（内容・方法）を見つけられる ②先を見通し、優先順位を考えた計画を立てられる ③課題解決のために、集めた情報を組み合わせ、新しい提案や探究ができる	
2	知識の活用について（主体的な学習や討論・発表を通して、知識を再構築し、応用することができた）	基礎力⑵シンキング ①課題解決に向けて、現状の課題・問題（内容・方法）を見つけられる ②先を見通し、優先順位を考えた計画を立てられる ③課題解決のために、集めた情報を組み合わせ、新しい提案や探求ができる 基礎力⑶チーム ①自分の考えを客観的・論理的に、相手に伝えることができる ②相手の話しをじっくり聴き、相手の考えの真意を理解できる ③先生や班員の多様な意見・やり方に柔軟に対応できる	
3	将来の進路について（多様な物の考え方や生き方があることを理解し、自己の在り方生き方を考えることができた）	⑹キャリア力 ①将来の職業や大学進学を踏まえ、自分に適性のある関心意欲を高め、進路・学習計画を立てる ②自己の適性のある進路を選択し、その進路実現に向けて積極的に取り組み、主体的に解決できる	
4	情報活用について（適切な方法で情報を収集・整理し、自己の考えで論文にまとめ、発表することができた）	⑸情報活用力 ①書籍・インターネット・FWを利用し、ゼミに必要な情報収集できる ②PCを使い、文書・表計算・PPT・動画などを作成できる ③FW・アンケート・実験の調査結果を分析できる	
5	表現について（発表や演習を通して、多様な自己表現の仕方を実感し、その重要性を感じることができた）	⑷表現力 ①書籍・論文を熟読・要約し文献として活用できる ②探究結果や自分（たち）の考えを、報告書・e-mail 等の文章で表現できる ③自分たちの考えを、発表を通じプレゼンテーションできる 基礎力⑶チーム ②相手の話しをじっくり聴き、相手の考えの真意を理解できる	

資料提供　静岡県立浜松西高等学校　大村勝久先生

して、「総合評価をしよう。評価視点1～5についてＡＢＣの3段階で自己評価してください」と自己総合評価をさせました（前頁参照）。そして、この自己評価も参考にしつつ、先生が各生徒の授業への取り組み姿勢、発表、課題レポート、グループでの活動などを鑑みて「総学」の成績評価としました。なお、総合評価では、教科リテラシーや専門知識の習得は対象にしていません。

⑤卒業時の振り返り

高校3年卒業時に、「総学ゼミ」について生徒にインタビューを行い、「社会人基礎力」や進路について振り返りを行いました。

卒業時の振り返りから見えてきたこと

ゼミ生17人の実際の進学先を見ると、全員がゼミで取り組んだテーマに近い学部・学科を選択していました。中には、大学の得意分野や教育方法まで研究し、大学選びをする生徒までおり、このことは、高校2年でテーマ研究に取り組むことは、高校3年次の進路先を決める大きな要素となることを示していると考えられます。

一方で、「社会人基礎力」の言葉の定着はなされておらず、言葉の意味も正しく理解できていない生徒が少なからずいることがわかりました。しかし、言葉の理解はなくとも、先生から見ると、ゼミを通して「社会人基礎力」は十分発揮、向上できたと実感されました。もっと気楽に「踏み出してみよう。考え抜こう。チームしよう」などとキャッチフレーズ的に紹介すれば、スムーズに頭に入るかもしれないというのが、先生の感想です。

■生徒からの声――今、頑張れているのは、2年前のおかげ――

（九州大学1年生G．K君〈2年前受講〉の後輩へのメッセージより）

高2の「総学ゼミ」では、経済についての書籍や資料を読みまくりました。レポートを期限までに提出するため深夜まで論文を書き、明け方に完成したファイルをメールで先生に送り、そのまま学校に行きました。そんなハードな学習体験が役立っています。毎週本を1冊読んで、班でパワポを作って発表・討論の繰り返しです。入学して2カ月足らずなのに、既に2回パワポを作って発表しました。おかげさまで十分やっています。周りはいわゆる地元の御三家高校出身の友達ばかりで、頭のよい連中ばかりですが、やっぱり発表＆討論の面では先生に「総学」で鍛えられたおかげで他の学生に負けず劣らず頑張っています。おかげさまでよい意味で目立つこともできました。

プログレスシート（中間自己評価）P2

2 高校2年の総学の課題研究での取り組みは、キーコンピテンシーをつけることが可能です。 以下の項目について、4月の状況を振り返り現在の状況をABCDで自己評価してみよう。また、特にAをつけた項目を中心にエビデンス（具体的な行動）を書こう。

A 十分高い B 高い C 少し低い D低い・該当しない

	キーワード	具体的な内容例	9月
表現力	（4）	①書籍・論文を熟読・要約し文献として活用できる	
		②探求結果や自分（たち）の考えを、報告書・e-mail等の文章で表現できる	
		③自分の考えを、発表を通じプレゼンテーションできる	
	エビデンス（具体的行動事実）		
情報活用力	（5）	①書籍・インターネット・FWを利用し、ゼミに必要な情報収集できる	
		②PCを使い、文書・表計算・PPT・動画などを作成できる	
		③FW・アンケート・実験の調査結果を分析できる	
	エビデンス（具体的行動事実）		
キャリア力	（6）	①将来の職業や大学進学を踏まえ、自分に適性のある関心意欲を高め、進路・学習計画を立てる	
		②自己の適性のある進路を選択し、その進路実現に向けて積極的に取り組み、主体的に解決できる	
	エビデンス（具体的行動事実）		

プログレスシート（中間自己評価）P1

平成〇年度〇年総学

〇〇ゼミプログレスシート（中間自己評価）

（国際・経済）班 HRNO NAME

目的	本校の総合的な学習の時間の目的

1 高校2年の総学の課題研究での取り組みは、キーコンピテンシーをつけることが可能です。 以下の項目について、4月の状況を振り返り現在の状況をABCDで自己評価してみよう。また、特にAをつけた項目を中心にエビデンス（具体的な行動）を書こう。

A 十分高い B 高い C 少し低い D低い・該当しない

	キーワード	具体的な内容例	9月
基礎力	（1） アクション	①課題研究に主体的に取り組める	
		②班員を巻き込み・働きかけて課題研究に取り組める	
		③課題研究の目標に向かい，取り組み続けられる	
	エビデンス（具体的行動事実）	4月の事前とは異なり、具体的行動事実を記入させることで社会人基礎力の理解を深める。自己評価するとき事前評価シートを振り返りながら記入させる	
	（2） シンキング	①課題解決に向けて、現状の課題・問題（内容・方法）を見つけられる	
		②先を見通し、優先順位を考えた計画を立てられる	
		③課題解決のために、集めた情報を組み合わせ、新しい提案や探求ができる	
	エビデンス（具体的行動事実）		
	（3） チーム	①自分の考えを客観的・論理的に、相手に伝えることができる	
		②相手の話しをじっくり聴き、相手の考えの真意を理解できる	
		③先生や班員の多様な意見・やり方に柔軟に対応できる	
		④班内で自分が求められている・やれることを把握できる	
		⑤班員同士のルールや約束、提出物の期限を守ることができる	
		⑥複数の課題に同時に取り組むことやグループ活動、によるストレスに強い	
	エビデンス（具体的行動事実）		

プログレスシート（中間自己評価）P3

3 課題研究を通して、教科学習を活用したり専門(大学で学ぶレベル)知識をつけることもできます。該当箇所のみでよい。自己評価は、4月当初記入したものについて中間発表までの半年間を振り返り自己評価しコメントを書こう。今後の計画も書こう。

A 十分高い B 高い C あまり高くない D高くない・該当しない

	キーワード	具体的な内容例	自己評価
教科リテラシー（活用）	例 数学	アンケート処理で統計処理を活用する。	C
	英語	FWを得た英語論文を参考文献として活用する	B
	国語（振り返り）		
	国語（今後）		
	英語（振り返り）		
	英語（今後）		
	情報（振り返り）		
	情報（今後）		
専門知識の修得	計量経済学	計量経済学の基礎を学び論文に活かす	D
	（振り返り）		
	（今後）		

ゼミ活動を見ると教科学習と関わりが高いのは国語、英語、情報だったので半年間の振り返りと今後の計画を並べて記入することとした

プログレスシート（中間自己評価）P4

4 4月当初の重点目標を振り返り，今後の目標を書こう。

①P1＆2からの重点目標（現状を踏まえてどのようなコンピテンシーを得たいか。）
例 計画性が弱かったので計画通り実行する

上記の重点目標を達成させるための計画（施策・手段）

②P3からの重点目標（現状を自己分析してどのようなリテラシーや専門知識を高めたいか。）
例 3種類の財務諸表を必ず読めるようにする

上記の重点目標を達成させるための計画（施策・手段）

③課題研究を進める上での不安･相談事項

図版提供 静岡県立浜松西高等学校 大村勝久先生